――　崩　落　――

　八月十二日から十六日まで、株式会社田波は夏休みだった。

　農村や山村からきている従業員は親戚への義理やら行事やら、半年ぶりに帰郷する友人との交流の機会だから、盂蘭盆が近づくと仕事なんか「の」になってしまう。

会社が盂蘭盆を夏休みにしたのは、三十年も昔からのことらしい。会社が操業していても、従業員が半分も休んでしまうので、仕方がなかったのである。

　八月十三日の未明、一志証太は脳髄に「ズシン」という強い衝撃を受けて、ベッドから転がり落ちた。

　証太には何が起きたのか分からなかった。

　独身寮の部屋を飛び出してあたりを見回したが、事故が起きたらしいようすもない。見上げれば、つい三日前までは東日本に記録的な大雨が二週間も降り続いていたのに、今夜は嘘のような星空である。

　辺りは静かで、遠くからバイパスを流れる車の音が、微かに聞こえるばかりだ。近所の人が目を覚ましているようすはない。

証太は十キロほど利根川の支流を遡った、山間の集落で生まれた。中学へ十キロの道を通いきれなかったので、株式会社田辺の隣にある叔父の家から学校へ通った。

証太は機械や工具が大好きで、夏休みや学期末の休みの時には、掃除を手伝ったり、工具、部品などの整理をしたりして作業者を喜ばせた。

高校生になってからはアルバイトとして、機械や工具も使って、修理部分の解体や、部分的な組み立てまでやらせてもらった。

使いやすい、工具の収納ボックスを作ったり、工具そのものに加工したりして使いやすくして、田辺の工場では「スパナを握って生まれて来たような子」と言われたものだった。

証太は今、大学院を出て株式会社田辺の営業担当社員である。社長の一人娘、美津子と婚約して、社長の後継者と目されていた。

最近になって証太は自分の勘が、自分自身でさえ不思議に思うほど、冴えてきているのを自覚していた。「山か谷か、生家の村で何かがあったに違いない」と証太は思う。

　着替えてバイクを引き出すと、静かに発進する。気がつくと燃料が尽きかけていた。

　バイパスまで来るとガソリンスタンドは明々と灯をつけ、従業員が忙しそうに立ち働いている。

　証太がガソリンを入れさせながら「三十分くらい前に、何かズシンという衝撃を感じなかったかな」と聞いても「さぁ、別に」という返事である。

　しかし証太は確かに感じたのである。

　数珠連なりで徐行している車列の左側を、注意深くバイクで走る。渋滞してスピードは出せなくても、停まることなく走るのを見ると交通事故ではない。やはり村で何かがあったのだと、証太の不安はますます募る。

　国道からそれて地元の人が大川と呼ぶ、利根川の橋を渡り利根川の支流に沿って坂道を上り、更にその支流に沿って険しい坂道に入る。

　谷は狭く深く、道路より十メートルあまり下がったところに、両方の斜面から厚さ四メートルほどの岩盤が突き出て、その下が広がって底が見えないほど深い谷が、細い悠久な流れによって刻み込まれている。

両側の急峻な山はその硬い岩盤に載せられているように見える。

　岩盤は谷底から見れば中二階のようである。

その岩盤には支流の入り口から谷川の奥の源流までに五～六か所の亀裂がある。

おおきな亀裂に沿って谷底の川岸まで渓流釣りや、渓流歩きのための坂道や階段が刻まれている。

　トラックがようやくすれ違えるくらいの、曲がりくねった登り坂の舗装道路を上って行くと、すぐわきの流れは岩棚の陰で見えないが、日中ならば上流の谷川の流れが泡立って白く見えるのに、今はまだ見通せない。

　証太が生家に着いて改めて谷をのぞいて見ると、ようやく霧が晴れて明るくなった谷間には水が流れていなかった。

「お父さん、大変だ」と、戸を開けながら証太は叫んだ。

「何事だ」と父の声。

「驚いたわ、どうしたの、今頃」と母がパジャマ姿のまま起きてくる

「谷の水が止まっている。全然流れていない」

　動悸が治まらず、渇きを感じた。証太は今朝目が覚めてから、水も飲んでいなかったことを想い出して、台所へ行って茶碗で水を何杯も飲んだ。

　両親が半信半疑で着替えて来た。

証太は両親と三人で家の西脇へ出て、谷川を見たが、水のない濡れた谷底の岩が見えるだけだった。

「山崩れだ。谷が塞がったんだ。時間が経つほど大きな鉄砲水や土石流になる。村長に話して対策を立てなくては」と、証太の父はすぐケータイで村長を呼び出しながら軽トラックを運転して村役場へ向かった。

　父は若いころ森林経営の夢をもって、広大な村有林を持つこの村へ来た。職員としてその村有林の管理を受け持ったのであった。

　谷が深いので、この集落に被害が及ぶ恐れはないと思われるが、大量の土石が流れ下れば、下流の村では大きな災害になる恐れもあるので、緊急に連絡しなければならないのである。

　証太たちの話し声を聞いて近所の人たちが集まってくる。

　中には驚いて大声で知人を呼ぶ人がいて、盂蘭盆のために昨夜から帰っていた人がますます集まってくる。

「こんなことは今までなかった。どうなるのか」と、不安そうに話し合っていた。

　証太と同じ町から帰って来ていた、証太より四～五歳ほど若い男が三人いた。彼らは親の代から町に住んでいたので、父親の生家に先祖供養のために来ていた。

　リーダー格の青年は青島俊之という。三木孝雄、服部圭司という二人は、青島の一年後輩である。他人のことに疎い証太は三人の顔に見覚えはあったが、後で美津子に聞くまで名前すら知らなかった。

その青島たち三人が、何やら目顔で頷き合って、や竹籠を背負って谷へ降りて行く。

　証太が驚いて止めるが聞こうとはしない。

坂道を下ろうとする男の後ろから、肩に手をかけて引き留めたが、その男に逆に手首を摑まれ投げ飛ばされた。

　証太は中学、高校の先輩で、警察官になった上原剛に誘われて、警察署の道場で柔道の稽古をしたこともある。警察の道場での稽古は、高校や大学のスポーツ化してしまった柔道とは違う。暴漢と直接に立ち向かわなければならない警察官は、武術を忘れてはいない。

その警察官を相手に一歩も譲らなかった証太が、あまりにも簡単に投げ飛ばされた。彼が茫然としている間に、三人の男たちは谷底へ下りて行ってしまった。

　気を取り直して、証太はバイクを駆って谷沿いの道を遡った。

谷川をせき止めている山崩れが、どの程度の規模かを証太は確かめたかったのだ。五キロばかり上った所で、土砂崩れのためにふさがり、谷のようすもそこから上は見えない。

　この道はバイパスができ、高速道路ができてから、管理も行き届かなくなっていた。崩れた土砂を取り除いて復旧させるどころか、廃道にされてしまうかもしれない、と証太は思った。

　この辺まで登ると谷が狭まり浅くなって道路が谷川に近い。こうしている間にも鉄砲水が襲ってくる危険がある。

この道は非常に危険だ。諦めて帰るしかないと証太は思った。早く集落に帰ってあの三人を、谷底から呼び戻さなければと焦った。

　集落に近づくと、魚を焼く匂いがする。谷に降りたあの三人が、背負い籠にあふれるばかりの魚を背負って来て、村中の家々に配り、村は時ならぬお祭り騒ぎである。

谷には「」のように、深い淵に残った水の中に、笊で掬えるほど魚が集まっているらしい。

　家に帰って証太が、

「一体どういうことなの。これほど危険なことを、年寄りたちが知らないはずがないのに、どうして止めてくれないの」と、村役場から帰っていた父に問いかけても、父は気まずく黙り込み、母は眉を顰めて俯いて今にも泣き出しそうで、いつもの両親とは違う。

　浮かれているときではないのに、誰に話しかけても魚焼きに熱中していて返事をしない。

ここで生まれ育ち、みんなに愛されてきた証太を、今日は誰も相手にしてくれない。

　村の空き家を利用した老人ホームに、美津子と「るい」が来ているはずだ。るいは証太と美津子二人に共通の友人である。

　美津子もるいも老人ホームの職員ではないが、常連のボランティアで老人たちに人気があるので、毎週のように来ているのである。

証太が行くと待ちかねていたように、空いている部屋に連れて行かれる。

「あの三人には口を出さないほうがいいわよ」と美津子。

　るいは、

「何か大きな事件になっているらしいのよ。

私服の刑事が大勢来て、村中の人からあの人たちのことを聞いていったばかりなのよ」と言う。

　るいの言う村中とは「村の中の、この集落」のことらしいが、刑事が大勢で来るとは大きな事件に違いなかろう。だからといって彼らが鉄砲水や土石流に、巻き込まれていいはずがない。

　二時間足らずで魚を背負い籠に一杯捕って、ふうふう言いながら川からの急な坂を上って来た彼らを、引き留めないわけにはいかない。

「何時土石流が来るかもしれない、鉄砲水かもしれない。いずれにしても気がついてからでは遅い。谷の底にいたら絶対に逃げられないよ。もう止めなさい」と説得したのだが、三人とも耳を貸そうともしない。

　夕方まで彼らは魚捕りを続け、もうどの家の冷蔵庫にも入りきれない。

　彼らはその魚を開き廃材の上に広げた、よしずの上に並べている。どうしてそんなに魚に拘るのか、証太には分からなかった。

　証太が何を言っても相手にしてくれない。

　魚を開き終わるとすぐに、足元を照らす懐中電灯と額につける電灯の、両方を用意してまた魚を捕りに行ってしまった。

　証太には長い夜だった。夜が明けて魚の加工場へ行ってみると、よしずの枚数が増えていた。

洗って廃材の上に広げた、よしずからはまだ滴が落ちていた。

　しばらくして谷から上って来た彼らは、一夜のうちに面やつれして、うかつには声もかけられないほど険しい表情だった。

　三人ともそれぞれの祖父母の家に入って食事をし、その後すぐまた魚を開く作業をする。

終わると籠を背負って出かける。必死に引き留める証太を突き飛ばして行ってしまった。

「何故なのか。これほど魚を捕ったのにまだ足りないというのか。何を考えてこんなことをしているのか」みんなが何かを知っている、何らかの事情があって、止められないのだ。

　昨日、証太がここへ来てからでも二十四時間はたっている。流れは細いが急流である。

　上流にはせき止められた、膨大な量の水が溜まっている。

　谷を埋め、これほどの水をせき止めている土砂、岩石はどれほどの量があるのだろうか。想像するだけでも恐ろしい。

　谷川に面した家は、道路より上側にあるので、これほどの深さの谷を土砂や鉄砲水が流れても、被害を受けるとは思えないが、これ以上時間がたてば、被害が及ぶこともありうるのではないか、と証太は急に心配になってきた。

　道路に沿って集落の家々を見て歩く。

道路自体が急斜面を削って作られているので、路面の高さの家は山襞を入った脇道にしかない。斜面を削って脇道を作り、小高いところに建てた家も数軒はあるが、車も耕運機も入らないので、葉煙草の乾燥や、農産物保管や、農機具置き場に使用されている。

　集落の家は谷筋からは引っ込んでいるし、谷筋の家は高いところにあるので、どれほど大きな土石流が来ても、あの三人を除いて、住人に被害が及ぶとは思えなかった。

　証太は警察署に電話したが、

「あんな深い谷底をちょろちょろ流れる小川に鉄砲水が流れても、人家に被害が及ぶことはありえないでしょう。まあ、地元の人たちで注意してもらうしかありませんな」と、相手にしてもらえなかった。

あの三人のことを話すわけにはいかなかったので、証太は歯噛みしたいほど焦っていた。

　集落を見回してもあんなに家々の軒下を漂っていた魚を焼く煙も見えない。

この集落出身の子や孫ばかりではなく、谷川上流の廃村出身者もこの集落に大勢来ているので、今ここにいる人たちの人口は、普段の三倍を超えるほどである。それなのに声を潜め、外を歩く人もいない。

　いたたまらなくなって、証太は彼ら三人の後を追って谷底へ降りて行った。

　うっかり普段履きの靴のまま来てしまった証太は、急な坂道に慣れているはずの足がすくむ。滑り落ちそうになるので腰を落とし、岩に刻んだ道を尻で滑るようにして谷間に降りた。

　証太を見た三人は一瞬唖然とした。

「どうして、一志さん。あんたがこんな所へ来ることはない、帰ってください。危ない、早く」と、今までと態度が全然違う。

リーダー格の青島は、

「一志さんを道連れにはできない。一志さん、その靴じゃこの濡れた岩の道は登れない。三木、服部、君たち二人で引っ張ってくれ。僕が後押しをする」と素早く背負子の縄を解く。

　証太の腰に縄をかけて縛り二人が引き、青島が後ろから腰を押す。

　坂道を登りながら青島は、

「実はね、一志さん。僕たちは取り返しのできないことをしてしまったのですよ。

自首することも考えましたが、裁判、刑務所入り、その後の前科者として生きる人生も、我慢がなりませんので、どうしようかと思っていたのですよ。

そこへ降って湧いた山崩れの騒ぎ、ここで事故死ということで幕を引きたかったのですがねー」と言う。

「取り返しのつかないことって、まさか殺人でも？」

前から二人がかりで引っ張ってもらい、後ろから腰を押してもらって、急坂を登りながらの話である。

「初めっから殺すつもりじゃなかったのですが、相手がチェーンを持っていたんですよ。

自転車のチェーンに革紐をつけた、喧嘩の道具ですよ。

そんなものを振り回されたんで、こっちも命がけになってしまって、気がついたら相手が死んでいたんですよ」

登り道では息が弾んで、そのくらいしか話せなかった。

　証太と青島たちは、谷を登り切って汗を拭いた。ひとまずは、やれやれ、と落ち着いて、

話を続けようといているときだった。

突然頭の上に雷が落ちたような轟音がして、谷川のはるか上、山の中腹にまで達するような泥水のしぶきが、疾風とともに谷間を駆け下った。

　水しぶきは五分くらいで行き過ぎたが、赤黒い水が轟然と流れ、水底を岩の転がる音も「ぐゎらぐゎら」と、三十分近くも続いただろうか。

　あまりの凄まじい有様に四人とも言葉がなかった。

　水しぶきの嵐が通り過ぎた後、村中の人が出てきて、濁流の勢い、岩の転がる音に驚き、声高に騒ぎ立てていたが、証太と青島たちは証太の家に入った。

　そこで証太は美津子、るいと一緒に三人の話を聞いた。

―青島の話―

　青島には相思相愛の人がいた。

　その人が急に彼を避けるようになったので、その人の友人を幾度も訪ねてようやく聞き出したのは、思いもかけないことだった。

青島の恋人、立川と友人三人が一緒に喫茶店に入り「ハーブ」と言われてちょっと変わったお茶を軽い気持ちで飲んだと言う。急に眠くなりテーブルに伏した。

　気がついたときにはホテルのベッドにいた。

　ひどい頭痛がしてしばらくは何も考えられなかったが、部屋の中には半裸の男がソファーでタバコをふかしていた。

　泣きながら抗議する淑子の友人にその男は「佐藤組の虎鮫」と名乗り、せせら笑った。

「うるせえ女は裸にして大川へ放り込む。てめえ一人だけじゃねえ。親兄弟も夜中に橋の上からドボンだ」と、脅されたという。

　淑子も一緒にいて「佐藤組の龍」という男に同じ目に遭わされた、と淑子の友人から聞き出したのであった。

　淑子の親をも脅して絞り尽くし、親たちは家屋敷まで売り払って、借家に住んでいるということである。

　淑子が初めて電話で助けを求めてきたのはつい一月前のことだった。

「『風俗と言われる店に出ろというのよ。いやだと言えば親兄弟が殺されます。

もう私はどうなってもいい、死んだほうが楽です。私は死んでしまえばいいけど、両親にこれ以上の迷惑はかけられない。

あなたにお願いできる話ではありません。それは分かっているけど、…』と言いながら泣くんですよ。

三木と服部に協力してもらい佐藤組のことを調べました。佐藤組といっても五人だけの幹部で、チンピラを脅して走り使いをさせているだけで、暴力団というほどの組織ではないが、やることは徹底した悪事でした。

　この五人は二年位前にどこから来たのか、得体のしれない男たちで、住んでいるところも決まっていなかったようでした。

女連れでホテルにしけこんでいたり、居酒屋やキャバレーなどを、乗っ取るようにして居続けていたこともあるらしい。

龍というやつだって「佐藤組の龍」と名乗っていただけで、苗字さえ分かりません。五人ともに、ひところ流行った映画や漫画に出てくるような名を名乗っていました。

それくらいしか分かりませんでした」

青島たち三人は子供のころから、空手の道場へ通っていた仲間で、三人とも高卒で就職したものの、彼らは正社員にはなれかった。

青島たちは空手の道場を開こうと相談して、就業時間外、土、日、祭日などに人気のない河原や川の膝くらいの流れの中で稽古をしていた。

足場の悪い場所での脚運びに慣れたり、川の流れの中で流れに逆らって歩くことで、足腰を鍛えたり、流れを歩いて下ることでバランス感覚を養ったりしていた。

二年くらい屋外で稽古をしていたが、農業をしていた青島の父親が建てた、六十六平方メートルほどの物置兼作業場を譲ってもらい、改造して道場らしい体裁を整えて、いよいよ弟子を募集しようと相談していた。

その矢先に淑子からの電話を受けて青島は、こらえていたものがはじけた。

青島にとって淑子あってこその人生である。生きがいを奪われ、踏みにじられた。彼は怒りにのたうち回った。

そんな青島を三木も服部も、他人事に思えるはずがなかった。相手は五人、こっちは三人、相手は喧嘩に慣れた、いわば喧嘩のプロである。どんな手を使うか予測もできない。

相手は五人でも「僕の相手は一人だ。一人で行かせてくれ」という青島をなだめて、三木が青島のそばを離れずに付き添い、服部が佐藤組のようすを調べた。

　居酒屋やキャバクラなどの、マスターやホステスも、初めは関わり合いを恐れて話してくれなかった．

服部が「恋人の復讐のための聞き込み」と打ち明けると、同情はしてくれたが、詳しいことを知っている人がいなかった。

　いたずらに過ぎて行く日々に、焦燥を募らせる青島を見ていられないと、三木と服部も、覚悟を決めた。

小雨の降り始めた夕方、青島たちは龍という男を呼び出した。

選んだ場所は川の近くで、自分たちの稽古場に使っていた人目のない河原にした。佐藤組の五人が一緒に来ることは覚悟の上である。

青島たち三人は、渓流歩き用の滑り止めの付いた靴を履いて、登山に使い慣れたロープを三メートルくらいに切って、両端に結びこぶを作ったものを腰に巻いていた。

青島たちの稽古していた川原である。川は流れが速く、膝上あたりの深さだ。

水の流れに逆らって上るときは、全身の力を振り絞って歩かなければならない。下るときは流れに押され、バランスをとるのが難しい。ときには転んで流されることもある。

二年間、基礎体力、バランス感覚を鍛えていた場所である。自分の体が覚えている場所を指定したのだった。

佐藤組は五人がそろって来た。青島が二五歳、服部、三木が二四歳という若さなのに対し、佐藤組の五人は十歳位年上に見えた。

初めに青島が龍と呼ばれる男に、淑子のことでその汚いやり方をののしった。龍はせせら笑って、手の内に隠し持ったチェーンで青島に打ちかかった。

佐藤組のほかの四人は、青島と龍という男の果たし合いを余裕の表情で見ていた。

青島は龍が真正面から打ち込んできたチェーンを、左に跳んでよけた。間をおかず横に払ったチェーンは、首を襲ってきた。チェーンは首を打つだけではない、巻き付いて肉に食い込み、命までを確実に奪う。

青島は地に体を投げ出すようにして、龍の足にタックルした。

一瞬「勝った」と思った龍は、目標を見失い青島のタックルに備えられず、勢いよく仰向けに倒れた。

　人の頭くらいの石がごろごろしている川原である。石に頭を打ちつけて龍は、目を剥いたまま息絶えた。

　三対五が三対四になった。二人が青島に、三木と服部に一人ずつが対峙した。

　青島はじりじりと後退して、二人の敵を川の中に誘い込んだ。日本刀を構えた二人は、青島を追い詰めたつもりになっていたが、青島は腰のロープを解いて水につけ、ロープを重くして武器にした。

　チェーンのように肉を切り裂くような武器ではないが、結びこぶがあり、水のしみたロープには充分な威力がある。

　青島が誘い込んだ辺りは、膝のあたりまでの深さで流れはかなり早い。青島は敵を上流にして、自分は水の流れを正面にして戦った。

　青島の敵は二人とも日本刀を持っていたが、足元を流れに押されて不安定な状態で戦うことになった。青島にとって腰の定まらない相手は、二人でかかってきても、物の数ではない。あっけない勝負だった。

　二人を倒し、河原に引き上げてから青島が、

「こっちは二人とも倒したぞ」と声をかけると、佐藤組の二人は逃げ腰になった。三木と服部は発奮して、まもなく二人とも敵を倒した。

　佐藤組の、四人は気絶しているだけだったが、一人は死んだ。

「四人を生かしておいて自分たちが警察に捕まるわけにはいかない」と青島は考えた。

どの道自分たちも、このままでは済まない。

殺人の罪で自分が捕らえられた後、三木、服部ばかりでなく、淑子とその友人にも、佐藤組の四人が何をするかわからない。その憂いをなくするために、青島は鬼になった。

三木と服部を無理に帰らせてから、青島は気絶している四人を、自分たちが武器として使ったロープで縛ってから自分の家に帰った。

青島は父のトラックを運転して河原へ乗り入れ、五人を乗せて祖父の家のある谷へ行き、橋の上から死んだ一人と、気絶したままの四人を谷へ落とした。

　その夜から二週間、時々間をおいて激しい雨が降った。青島は夜中に雨の中を、そっと谷のようすを見に行ったが、谷の水は思ったほど増えていなかった。

　青島たち三人は、このままで済むとは思っていなかったが、普段のとおりに会社へ通い、いつものように空手の稽古を続けた。

　まもなく盂蘭盆の夏休みになった。

　青島は淑子に会って「もう安心していい」と話した。

「警察官から何を聞かれても君は知らないことにしなさい。事実なにも知らないのだから」とも。

　聞きたいことも話したいことも、山ほどあったが口に出せることではなかった。お互いに心の傷口はまだ血を流していた。慰めの言葉さえ口に出せなかった。

青島は、この上淑子に、他人の好奇の目を向けさせたくはなかったので、固く口止めをしたのだった。

　水商売の仲間では「佐藤組のならず者が一人もいなくなった」と話題になっていた。どこからの情報か、警察が動き出した。そのことは青島たちの耳にも入った。

　青島たち三人は盂蘭盆で、例年のとおり祖父母の家に行った。翌朝、あの山崩れによる水涸れが起きた。

　したくてした殺人ではなかった。しかしそんな言い訳が通るわけがないことは、分かり切っていた。

たとえ悪人でも「五人の命」は重い。

切羽詰まった青島たちに山崩れ、やがて来る土石流は天啓と思えた。お互いに顔を見合わせただけで、考えていることが分かった。

　青島たちは小学生のころ、この谷川で掻堀をしたことがあった。小学生の力では流れを、完全にせき止めるのは不可能だった。

迂回水路を掘りかけたが、岩には鍬も歯が立たない。どうしてもできないので、悔しい思いをしたことがあった。

それが今は、淵に集まった魚が、笊で掬い放題である。

　一時は自分たちの置かれた窮状を忘れ、夢中になったが、忘れられたのはほんの一時だった。

興奮が冷めると、圧し潰されるほどの重圧にうめいた。

　二十四時間を過ぎて、さすがに彼らも疲れ「何時そのときが来るのだろう」と、恐れながらも、早く来てほしい、早く終わらせたいと焦った。

　そんな折、証太が谷底に降りて来た。

　青島は「初めから責任をとって、自分一人で死にたい」と思っていたが、三木も服部も承知しなかった。

　証太が谷へ降りて来たとき「これで二人を死なせないで済む」と青島は思った。

　三人が証太を助けて谷を登った。

「ときに合わせるように起きた、鉄砲水と土石流」に、三人はここで死んでしまうことは、許されないことだ、としみじみ悟った。

聞き終わった証太が思ったことは、

「神様のお怒りは、この美しい谷に最も汚いものを捨てたことだろう。

悪魔の所業をなす者は悪魔だ。それを裁くのは神様のなさることだ。

　佐藤組の五人を始末させたのは、神様のご意思だったのかもしれない。そういう例は旧約聖書の中にたくさんある。

　神様のお裁きより、今はまず、この世の裁きを受けさせなければならない」

証太は自首を勧めた。

青島たちはすぐに警察署に出頭して、佐藤組の五人と決闘して、殺したことを自供した。

　証太は知人の弁護士に弁護を依頼した。

　弁護士は青島たち三人の供述について、興信所に事実の調査を依頼した。興信所の調査でも、証太が佐藤組の五人について、青島から聞いた以上のことは、分からなかった。

戸籍はおろか、この街に来る前にどこに住んでいたのかさえも、分からないのだった。

　警察が全力を挙げて捜査しても、定住していたという情報すらない。ホテル、キャバレーなど、彼らがいた場所、出入りしたと特定された場所は、不特定多数の人が出入りする場所ばかりで、指紋すら出てこなかった。

警察の捜査は、住民の協力が得られなかったのだ。

協力したところで住民には何の益もない。

ホテル、キャバレー、スナックなどは、佐藤組と多少でも関係があった、と報道されれば、顧客に嫌われて営業も出来なくなる、という懸念があった。

彼らがいなくなってすぐに、佐藤組の者が来たことのある場所は、隅々まで掃除しなおされ、指紋の出そうな物は洗いなおされた。

疑われそうな物は、処分されてしまったのである。

住民の協力がなくては、状況証拠さえ集めることができない。

結局、三人の自供を裏付けしようと、懸命の捜査をした警察の努力にもかかわらず、佐藤組の五人の正体は判明しなかった。

警察で青島たち三人を逮捕して、四十八時間以内に検察へ、送検しなければならないのに、青島、三木、服部による自首、自供の裏付けは何一つ得られなかった。

その殺人の証拠はおろか、殺された者の正体すらわからない。

通常こういう場合、容疑者を一応別件の罪名で送検しておいて、時間を稼ぐのが警察の定石なのだが、その別件さえ警察では掴めなかった。

最近、二十年も懲役に服してきた囚人の再審が決まる、という事件があったばかりで、自白偏重の取り調べや、裁判のあり方が厳しく批判され、取り調べ過程のすべてを映像にすべきだ、という世論が強くなっている。

ましてこの街の警察は評判が悪い。表面上は犯罪の少ない穏やかな街でも、暴力事件は少なくないのに、扱いが軽いという市民の不満が、新聞に投書され、新聞の記事も競って警察の無能を責める。

四十八時間が過ぎ警察は検察に、さらに二十四時間猶予をもらったが、具体的な収穫がなかった。

数少ない監視カメラの映像も、明らかなものがない。カメラ自体が数少ない。その上に佐藤組の五人は、髪を額にかぶさるほど長くし、用心深くサングラスで顔を隠していたので、判別できるものがない。

ないない尽くしの中で作った似顔絵は、出来が悪すぎる、と評判が悪かった。

多くの人が佐藤組の者から、脅迫などの被害を受けていた。その被害者たちからも、身元についての情報は得られなかった。

猶予してもらった送検の期日が迫る。警察ではもう打つ手がなかった。

青島たち三人を証拠不十分で、釈放せざるを得なかった。

こんな田舎町で、五人もの「佐藤組」と自称した人間が何者だったのか、いつ、どこから来たのかも割り出せない。あまりにも頼りないではないか。

地方紙は非難の矛先を警察に向けた。

いくら捜査しても、分かったのは、佐藤組の非道ばかりであった。

非道の果てに殺されて、深い谷に投げ込まれ、そのまま流されたのか、その後の土石流に巻き込まれたのか、谷から利根川まで大勢の警察官が出て、捜したが何も出なかった。

あの土石流のため、すっかり変わってしまった川筋を、さらって見るまでもない、出るのは警察官のため息ばかりだった。

「普段から暴力に甘いからだ」など、警察に対する非難は厳しかったが、「無力な警察があてにできないので、しかたなかったのだ」と、青島たちに対する非難は不思議なほど少なかった。

釈放された三人は勤めを辞めて、青島の父親が作っていた畑を三人で引き継ぎ、できた野菜を道の駅に出荷し、ぎりぎり生きていくだけの生活費を稼ぎながら、合間を見ては空手の稽古に励んでいた。

そんな彼らの所に、入門希望の少年たちが訪れるようになったが、受け入れられるはずがなかった。

つい二年ほど前から、急に物騒になったこの街で、この事件が話題になればなるほど、警察が非難される反面、青島たちが困ったのは、英雄視されることであった。

青島たち三人は英雄視されて、いい気になっていられるわけがなかった。証拠不十分で釈放にはなったものの、良心の呵責は稽古に励むだけで紛れるものではない。

物心つく前から両親の信仰を受け継ぎ、迷うことなく信仰に基づいて大胆に行動する一志証太こそ、青島たちには英雄と思えた。

証太を心の支えにしたい彼らの思いは、証太にも分かったが、自分が英雄視されるのは心外だった。

仕方なく証太は殺人という、罪の重さに悩み苦しむ三人に、

「どんな罪も心から悔い改めれば許される」と説いた。

　キリスト教は伝道する宗教である。証太はまだ伝道の経験がなかったが、神の救いを伝えるのは、キリスト者としての義務である。

　証太は思いを伝えられない、自分が歯痒かった。『聖書』を読み直し、教義に関する本を読み直した。

何の疑いもなく、真理として信じ切っていたものを学びなおし、自分の信仰が正しいのか、日ごろの行動が正しいのか、考え直すことが多かった。

　伝える証太にとって当たり前の信仰を、口で説明するのは難しく、苦しみながらの伝道だった。

　所詮自分の考えや自分の信仰だけでは、どうにもならない。「神様に問い続けるしかない」自分の心を空けて、神様の御言葉に耳を澄ませ、悟ることができるまで、祈り続けるしかない。

　証太は三人に詫び「教えを伝える力は僕にはない。一緒に祈ろう」と言った。牧師に相談して、伝道に実績のある人を推薦してもらい、一緒に自分も勉強しなおそうと思った。

　一週間ほど間をおいて証太は青島たちの道場へ行った。

　三人は、形は稽古に励んでいるように見えたが、証太の目からは「心ここにあらず」という状態で、見るに堪えなかった。

「何をしているんだ」と、激しい声で証太は三人を叱った。

「何をって…」三人は視線を泳がせて、どうしたらいいかも、考えられなくなっている。

覚悟を決めて自首し、すべてを自供した三人であるが「証拠なし」と言われて、警察署から追い出されるようにして、帰ってきたその日から緊張が解けて、人生の目標を見失ってしまった。

「どうしてあのタイミングで土石流が起きたのか。あれほどの体験で悟ったことは、自裁してはならない、ということだけだったのか。情けない。

二〇一〇年五月の刑法改正で『決闘の結果の殺人、死刑、無期、五年以上の懲役』に該当する犯罪には、時効がなくなったんだ。

どんな小さな証拠でも、状況証拠でも君たちは、逮捕され裁判にかけられる。

うじうじしている時間はない。青島君！　淑子さんをどうするんだ」

「ほかの二人は、ご両親や兄弟たちに何をして上げられるんだ。

一日一日が神様のお恵みの日じゃないか。

毎朝、今日できることを考えろ。どうすれば神様の御心にかなうかを考えろ」

　証太に発破をかけられて青島は、バイクに跨って飛び出して行った。

　三木と服部は、窓から覗き込んでいる子供たちを中に入れて、一人ひとり丁寧に空手の基本を教え始めた。

　警察は証太をも「証拠隠滅」「犯人隠匿」「公務執行妨害」などの疑いで調べていることが分かった。

他人事ではない、証太自身のこととして、そのときに備えなければならなかった。

　収穫の季節を前に株式会社田波は繁忙を極めていた。農家の繁忙期に先立って農機具の販売、修理ともに短納期で追われる。

　従業員の中には農業を兼業しているものが多かったので、証太は社長に進言して残業をなくし、定時に仕事を終わりにした。

毎朝「始業ベルが鳴っている、五分の間に仕事を始めること」を全社員に求めた。

終業時間から身支度する時間を、二十分と決めて、二十五分以内に退社、特別に打ち合わせや、得意先との連絡など、やむを得ない会議、打ち合わせなどは別棟に移ってするようにした。

証太は、得意先回りからなるべく早く帰って、終業時間になって従業員が工場から退出する前に、工程を予定表とチェックして、工場内を掃除し整理させた。

証太は工程のうちネックになりがちな現場を一緒に掃除し、整理整頓することで自分が受注した仕事の進捗を確実に掌握することができた。

残業代を稼ぎたがる者もいたが、家庭菜園を奨励して、残業の代わりに楽しみながら家計の足しにするように説得した。

「営業部の一志さん」が、美津子と婚約してから「社長の後継者、一志さん」に従業員の意識が変わり「経営者が直接自分の仕事を見ている」という張り合いのある職場になったのである。

作業者にとっては、上司に自分の努力を知っていてもらえるという半面、作業の進捗状態を完全に掌握されるということは、気を抜けないということでもある。

新しい従業員は、あまりに管理が行き届きすぎて窮屈だ、と不平を言ったが古参の者は「一志さんは高校生時代のアルバイトのときと変わらないな」と笑って話題にした。

工場の主といわれる定年過ぎて、嘱託として技術指導を委嘱されている人たちは「スパナを握って生まれてきたような子」といわれた証太の中学生時代のことまで覚えていて話題にした。

要は経営者と従業員との信頼関係である。従業員が「業績さえ上げれば、待遇も上げてもらえる」と、期待できるか。信頼できるかである。

各自が時間内に作業に一区切りをつけて、整理整頓をしてから退出するようになった。

　現業部門の能率が十パーセントも向上した。

十パーセント上がるということは、その十パーセントには労務費と経費の大部分がかからないので、生産費の中の半分が必要ない。能率アップした分についての粗利益は五〇パーセント近くになる。

こんな時に待遇を上げなければ、業績は徐々に落ちる。サボられるのである。

　美津子は会計ソフトを使用して、毎日の業績をグラフにして夕方社長に報告した。社長は美津子の報告によって毎日の利益率を、その日のうちにグラフで見ることができる。

社長はその数値に満足していたが、美津子と婚約の後、証太の進言に従って取り入れた改革に多少の不安も感じていた。

工場の一番忙しい時期が過ぎると、農作業の忙しい時期が来る。

証太は渋る社長を粘り強く説得して一か月間、就業時間を一時間短縮した。給料は据え置きのままである。社長は心配したが業績は落ちなかった。

自然と不平を言うものがいなくなった。

終業時間の前に証太は工程表を持って工場を回ったが、奇麗になっていて彼が掃除をする必要はなくなった。理髪師が切った髪の毛を掃除してから次の仕事をするように、工程の中で掃除、整理をすることに従業員が慣れたのである。

終業前の巡回に証太は美津子を連れて一緒に回ることにした。

美津子はちょっと不審に思ったが、素直に従った。従業員の中には証太と美津子をからかおうとする者がいたが、証太の表情は厳しかった。

いつもの、のんびりと誰とでも気軽に話し、冗談を言い合う気軽さが消えて、うっかり言葉もかけられない雰囲気が見て取れた。

美津子は証太のすっかり変わってしまった表情に、証太の苦しさを感じ取って胸を痛めた。

終業後、美津子が証太を誘ってバイクで国道を走った。道の駅にバイクを止めて二人で河原を歩いた。

証太のほうから話を始めた。

「二〇一〇年五月の刑法改正で『決闘の結果の殺人、死刑、無期、五年以上の懲役』に該当する犯罪には、時効がなくなったんだ。

時効がなくなったので、法理論の上では、青島たち三人は一生被疑者として、身の回りを捜査されるということだ。

　三人の供述の内容が詳細で正確なために、信憑性が高い。部分的にでも裏付ける証拠があれば送検し起訴できる。

警察は僕のことも、証拠隠滅、犯人隠匿、公務執行妨害などの疑いを持って調べている。

　国家権力が本気になってすることは、ばかにならないのだよ。

　僕が逮捕されたときに、この会社に迷惑をかけないような体制を、早く作らなければならない。

美津子さん。あなたが中心になって会社をまとめてください。社長には大所、高所から会社全体を見てもらわなければならない」

「あなたはどうするの。あなたがいなければもう会社を動かなせいわ。あなたが作り直してしまったから」

「いや違う。美津子さんが会社の中心になって社長を支えるのだ。青島たち三人も罪を自首、自供をしているし、佐藤組の五人がしたことがあまりにあくどいから、彼らもあまり厳しい刑にはならないだろう。

真実が明らかになれば、僕の無実が証明されるだろうが、一度は逮捕されて取り調べを受けるだろう。それを覚悟して、会社に迷惑のかからないようにしなければならない。

　すべてが判明するまで、美津子さんが会社を支えなければならない。

　二十人の従業員とその家族のために、美津子さんの覚悟が必要なんだよ」

「あなたも私も、何にも悪いことをしていないのにどうして。どうしてそんなことになるの」と美津子は泣いた。

友達に会うたび、

「お式はいつなの。お祝いに何を贈ろうかしら」と訊かれて、証太に結婚式の日にちなどを相談したい、と思っていた矢先のことだったので、日頃は気の強い美津子も、思わず涙をこぼしたのだった。

「僕は『株式会社○○○○』とか、何とかいう商事会社を作って、株式会社田波の取引先として独立することになる。

　美津子さんが僕の所属している教会で、洗礼を受けてくれれば、教会で内密に結婚できる。

　婚姻届けはようすを見てからでいい。教会で、牧師を証人に神様のお許しさえ頂けば、それでいいと思うよ。披露宴は僕の無実が証明されてからでいい。ご両親には僕から話そう」

　二人で美津子の両親に話した。

　両親はそこまで考えなくても、と言ったが、あまりに警察が新聞でたたかれ、市警幹部はとにかく何か、実績を上げなければならないと、常軌を逸したな捜査指揮をしている。

　検察のいら立ちも強い。

証太には、苛烈なでっちあげが行われる、という予感があった。

　青島は淑子を連れて、証太の父義明を頼って父親の生まれた村へ来た。

山の手入れをしたり、椎茸のホダ木を切ったり菌種を植えたり、村中の家の修理など、義明のアシスタントとして働き始めた。

三木も服部も青島を慕ってこの村へ来た。

屈強な若者三人と、老人たちの世話をすることになった淑子とが、新たにこの村の住人になったので、村人たちは喜んだが四人の表情は暗かった。

義明は証太、美津子、青島、三木、服部、淑子を集めて、

「君たちは何をびくびくしているのか。自首したときにはもっと堂々としていただろう。証拠不十分で釈放されて、却って臆病になったようだな。

自然の力が、川でも谷でも、あれほど完全に証拠を押し流してしまったこと。

町の人たちが、警察が総力を挙げて捜査しても何一つ掴めないほど、君たちの自供を裏付ける、証拠を消し去ってしまったことを、どう解釈するのか。

仮に検挙されて刑罰を受けても、君たちが世間から嫌われることはない。

もしそんなことがあっても、そのときはここに君たちの帰る場所がある。悪いのは死んだ佐藤組の者たちだ。

彼らがあまりにも悪辣だったからだ。君たちは堂々としていなさい」と諭した。

　証太は、

「悪魔の所業をなすものは悪魔だ。僕たちは堂々としていればいい。みんな始めからそうだっただろう。いまさら恐れることはないよ。

　何しろあの、凄まじい土石流に隠れて、地獄の果てまで遁走しようとした君たちだからなー」と笑った。つられてみんなも笑った。

　淑子が突然、

「ひどい！　俊之さん。私をおいて三人で死んでしまうつもりだったのね。私をおいて―」と泣き出した。

　ここに来てから、ほとんど表情を見せなかった淑子の、派手な泣き声にみんながあっけにとられた。

　青島は立ち上がり、軽々と淑子を抱き上げると「よしよし」と赤ん坊をあやすように揺すりながら庭へ出て行った。

　証太が父の耳に口を近づけて、

「お母さんもあんなにぐずったこと、あったの」と訊いた。

「忘れた」という、そっけない返事は、多分に「あった」と思わせる。

「なかったわよ！　」と語気を強めた母の言葉に、みんなが大笑いした。

笑ったことで少しは気分が楽になって、

「でも、このままで済むことではない」と、改めて覚悟を決めたのだった。

一日、一日が明日のない貴重な日である。

恐れはいつもある。しかし、時間は何よりの薬である。

次第に落ち着き、明日のない一日ずつを大切に、大切に生きることに慣れてきた。

覚悟して、罪の人生を生きる。

その生き方は、修行者のように清く、潔い、満たされた生き方でさえあった。

（完）